

げて回復を女将に伝えた。	らぬ視線を泳がせながら、ぎこちなく頭を下	軽く頭を下げ番才が答える。紅蘭は未だ定ま	した。」	「ええ、おかげさまで。すっかりよくなりま	覚えてしまう。	気に包まれたこの空間に、なぜだか安心感を	話し合いというより井戸端会議のような雰囲気	紅蘭は痛みは引いたかい？」	「まあまあ落ち着きな。どうだい？番才に	いる。」	し、女将の頭上には奥占もふわふわと浮いて	声が響く。美禄や雷鼠や漠空もその場に参加	一人机の上に立ちポーズを決めている仏蘭の	教えなさい！」	「さあ、どうすれば雫や熊を助け出せるのか	ちは、揃って女将の顔を見ていた。	カウンターの横のソファーに座った番才た	不思議な議題
--------------	----------------------	----------------------	------	----------------------	---------	----------------------	-----------------------	---------------	---------------------	------	----------------------	----------------------	----------------------	---------	----------------------	------------------	---------------------	--------

「ひっひっひっひっ。そいつはよかった。みんな覚えておくんだよ。ここでは怪我をしても疲労が溜まってもすぐに治すことができる。ただ痛みは痛み。疲れは疲れとして感じることは避けられん。安全に過ごすのが一番だ。ねえ、雷鼠や。」

「うんっ！ぼく今食べるものが大好きになっちゃったんだ。ご飯を食べてるとぼくちゃん生きてるんだって思えるから。だからそれができなくなると嫌だもん。」

横で美禄は顔き、番才の口角が緩む。あれから雨は一度も降っていないが、今の雷鼠ならば自傷衝動にも打ち勝てるのではないかと希望が湧いてくる。

「それに、美禄姉ちゃんが毎日いろんなことを教えてくれて、ぼくもっとたくさん知りたいうって思うんだ。」

「ひっひっひっ。そうかい。何かを学ぶということは、そのものについて関心を寄せるということだ。それができる物は自分にも関心

は	間	「	し	は	た		よ	と	腰	将	笑		が	て	和	「	っ	を
ど	に	ん	合	依	い	「	う	も	に	！	ま		割	く	や	は	ぱ	寄
こ	合	も	わ	然	だ	栗	に	せ	手	栗	し		っ	れ	か	い	い	せ
か	わ	ー	な	と	が	の	何	ず	を	の	い		て	る	な	あ	あ	る
で	な	っ	い	し	、	身	か	女	添	身	け		入	。	会	り	が	こ
苦	い	！	で	て	そ	に	が	将	え	に	ど		っ	だ	話	、	と	を
し	し	そ	し	わ	れ	何	、	は	一	何	だ		て	が	が	う	う	を
ん	よ	ん	よ	か	が	か	そ	一	歩	が	の		き	、	張	を	を	が
で	！	な	！	っ	れ	起	れ	度	ず	起	の		た	、	り	を	を	で
る	？	悠	？	て	ど	き	鳴	お	つ	た	は		き	、	詰	言	。	可
か	こ	長	う	お	の	た	ら	茶	近	は	間		た	、	め	わ	。	能
も	う	な	し	ら	よ	は	し	を	づ	違	違		そ	、	た	な	。	え
し	し	こ	て	て	う	い	て	口	い	い	い		ぐ	、	ん	の	。	。
れ	い	と	い	。	な	な	か	に	て	な	な		わ	、	じ	な	。	。
な	る	し	る	。	の	の	か	含	く	さ	い		ぬ	、	ゃ	か	。	。
い	今	て	今	。	な	い	説	み	る	あ	！		威	、	ね	の	。	。
で	も	い	も	。	か	み	明	、	仏	さ			勢	、	え	話	。	。
し	雫	る	雫	。	か	味	し	味	蘭	い			で	、	。	。	。	。
よ	。	よ	。	。	か	わ	な	わ	を	。			人	、	。	。	。	。
？		。			か	う	。	。	物				形	、	。	。	。	。
					か													

「	ひ	っ	ひ	っ	ひ	っ	。	さ	す	が	の	あ	ん	た	で	も	動	揺
う	に	声	を	張	り	上	げ	る	。									
か	な	い	。	仏	蘭	は	動	揺	す	る	気	持	ち	を	悟	ら	れ	ぬ
る	が	、	経	験	し	た	こ	と	を	伝	え	る	に	は	こ	う	言	う
自	分	で	も	言	い	慣	れ	て	い	な	い	こ	と	は	わ	か	っ	て
よ	！	？	」															
い	た	し	、	上	か	ら	下	り	て	き	た	っ	て	ど	う	い	う	こ
ね	。	あ	れ	は	一	体	何	？	お	か	し	な	窓	に	変	な	や	つ
の	も	の	と	は	思	な	い	化	物	を	見	た	わ	！	傘	の	化	物
さ	せ	て	あ	げ	る	。	わ	た	し	と	紅	蘭	は	三	階	で	こ	の
「	そ	れ	よ	っ	！	い	い	わ	、	ち	よ	っ	と	だ	け	話	を	逸
た	で	あ	ろ	う	こ	と	も	疑	い	よ	う	が	な	い	」			
い	た	よ	う	に	、	上	か	ら	何	か	が	下	り	て	き	て	し	ま
は	大	体	わ	か	っ	た	。	そ	し	て	、	漠	空	も	受	け	取	っ
	「	奥	占	と	あ	ん	た	達	の	話	か	ら	何	が	起	き	た	の
か																		
飲	み	を	口	元	に	運	ん	だ	。									
が	そ	れ	で	も	女	将	は	動	じ	ず	、	再	び	湯	気	の	で	る
湯																		
ッ	ク	を	打	ち	鳴	ら	す	よ	う	な	音	が	弾	け	て	い	る	。
だ																		
机	に	地	団	駄	を	踏	む	仏	蘭	の	足	下	か	ら	、	プ	ラ	ス
チ																		
て	か	名	取	も	含	め	て	ど	こ	に	行	っ	た	の	よ	！	」	

蘭、仏蘭の部屋は二階に、美祿と雷鼠の部屋
 「じゃあヒントだ。この場にいる番才や紅
 ちの顔が上がっていく。
 一人と、確実性のない解答を抱いた宿泊者た
 “宿屋側の都合”としか思えない。一人また
 なく、偶然やたまたまその部屋が空いていた
 慮するとそのようなことに思考が巡るわけも
 屋に来たこと自体が謎であり、その理由を考
 答えを考えだした。しかし、そもそもこの宿
 漠空や奥占を除く全員が女将の問いに対する
 になつたのかを考えたことがあるかい？」
 「まずあんた達の部屋が、どうして今の階
 知っているような素振りは見受けられない。
 ろう紅蘭や美祿たちを一瞬だけ見てみるが、
 自分よりも長くこの場所に滞在しているであ
 聞かせようかね。」
 てもいいことだが、この宿のことを少しだけ
 「でもまあちようどいい。本来なら教えなく
 番才はそこで初めてその事実を知る。
 は隠せないねえ。」

し	「	経	美	「	制	話	た	の	女	「	真	「	番	う	「	け	そ	は
み	ど	由	禄	人	止	の	待	し	将	あ	っ	才	じ	も	が	れ	三	
た	う	して	と	間	を	展	っ	か	の	あ	直	が	の	す	頭	ぞ	階	
い	見	女	雷	じ	求	開	た	か	重	あ	ぐ	代	の	ぐ	を	れ	に	
に	た	将	鼠	や	め	を	ー	か	み	、	に	表	の	く	動	の	あ	
何	っ	に	の	な	る	許	！	っ	の	、	女	し	大	か	か	こ	る	
か	て	視	顔	い	。	す	！	。	あ	將	将	雑	し	し	と	と	。	
の	人	線	を	っ		ま			あ	に	に	把	て	と	”	理		
中	間	を	窺	ど		い			あ	正	問	に	い	”	解			
に	じ	戻	い	う		と			あ	否	う	言	る	”	し			
魂	や	す	、	こ		よ			あ	を	か	う	番	”	て			
が	な	。	そ	と		っ			あ	問	し	才	と	”	い			
宿	い		の	よ		！			あ	う	よ	と	美	”	る			
っ	！		後	っ		？			あ	か	う	と	禄	”	番			
て	？		番	！		待			あ	”	か	”	だ	”	才			
ん	わ		才	？		っ			あ	”	”	”		”	と			
の	た		や	！		た			あ	”	”	”		”	美			
？	人		紅	？		待			あ	”	”	”		”	蘭			
？	を		蘭	」		っ			あ	”	”	”		”	を			
蠟			を	」		っ			あ	”	”	”		”	重			
人				」		っ			あ	”	”	”		”	く			

形とか？でもわたしは人間として扱われてい
 るわ。わかるようにちゃんと説明して！」
 混乱しているのは一目でわかる。合点がいつ
 た番才は、その後の“上から下りてきた物”
 のことを想像して、恐怖で顔が引きつる。
 「二人が三階で見た物はここの宿泊者の一
 人だよ。窓の側にいたという“なにか”も同
 様に。」
 「宿泊者！？」
 「そうだよ。みんなあんだ達と同じ宿泊者だ
 ただし生きている次元が違う。」
 「次元！？」
 頭を抱え仏蘭は機械のようにおうむ返しをし
 ている。
 「そこにいる美祿と雷鼠は、あんだ達三人
 とは違う場所からやってきた。美祿は妖怪が
 存在する次元から。雷鼠は天界で生まれそこ
 で育った。」
 引きつった仏蘭の顔が和装の女と金髪の少年
 に注がれる。臆すことなく穴が空くほど二人

を睨みつけ、「じゃあ何？この二人は人間じ
 やないの！？」と両手を広げ確認する。
 「あんた達から見るとそういうことになる
 もつと高貴な存在。もつと高次元の存在だ。」
 女将のその発言を聞き仏蘭は机の上でよろけ
 先の展開を想像して顔を引きつらせていた番
 才に視線を送る。
 「・・・わたしはすでに聞かされていました
 ので。」
 焼けつくほどの熱視線を浴びせかけられ、番
 才は別の方向を向きそう答えた。
 「あんたそれ知ってたんならっ、わたしに
 話した時に教えときなさいよー！」と仏蘭は
 助走をつけて飛びかかった。
 「いつぞや話した時はいろいろあって仲良く
 なった宿泊者と、助けようとしてあんたが返
 り討ちにあつた少年がいるとしか言わなかつ
 たじゃないの！それがここにいる美祿と雷鼠
 のことね！それ知ってたら紅蘭があんな大怪
 我することもなかつたのよ。こんにゃろー！

つ	番	上	や		よ	仏	よ	で	を	は	う	分	て	お	「	話		げ	袖
と	才	の	っ	「	う	蘭	っ	あ	返	家	ん	け	ん	偉	う	し	て	や	か
尋	の	宿	た	待	に	の	！	ん	し	具	で	ち	じ	方	る	欲	髪	ら	襟
ね	首	泊	の	っ	そ	八	も	な	な	の	し	ゃ	な	な	し	く	の	元	ま
る	か	者	っ	て	こ	つ	っ	な	さ	一	よ	っ	い	の	に	く	毛	ま	で
。	ら	の	て	。	に	当	と	な	い	つ	い	っ	わ	な	そ	な	を	一	気
	顔	せ	、	。	い	た	上	ら	の	も	。	。	よ	ん	ん	引	張	に	駆
	を	い	ひ	。	る	り	は	、	の	。	。	っ	っ	な	な	つ	る	。	け
	覗	だ	よ	。	五	の	。	。	よ	。	。	。	。	小	。	。	。	。	登
	か	っ	っ	。	人	言			う					さ				り	
	せ	た	。	。	の	葉			。					な				、	
	た	仏	。	。	思	に			。					。				耳	
	蘭	蘭	。	。	考	誘			。					。				や	
	が	が	。	。	が	導			。					。				も	
	、	。	。	。	一	さ			。					。				み	
	女	。	。	。	致	れ			。					。				あ	
	将	。	。	。	し	る			。					。					
	に	。	。	。	た				。					。					
	そ	。	。	。	。				。					。					

「ああ、まず間違いないだろうね。」
 女将はゆつくりとお茶を胃に流し込んだ。
 「四階五階、さらにその上へと階を重ねる
 毎に、あなた達では干渉もままならないほど
 の物たちが宿泊している。神に近い存在。神
 それ以上の物もここにはいる。」
 壮大過ぎる話の展開に、誰も言葉を発するこ
 とができない。「天界」という言葉から連想
 していた世界では、雷鼠はかなり高貴な存在
 のはずである。その雷鼠が三階に宿泊してい
 る。その事実が話をさらに雲の上へと押し上
 げていた。
 「その物たちもあなた達と同じように悩み
 苦しみここに流れ着いてきた。そこに至るこ
 とも不可能なほどの悠久な思考の果てをさま
 よう彼らは、本来ならば人前に姿を見せるこ
 ともない。だが、誰かが下りてきたんだよ。
 あなた達では抗うこともできないほどの存在
 それが誰かを突き止めないと、雫は元には戻
 せない。」

「それを回収する手段はあるの？」	要だ。」	えると、今回は雫があの時抱いた恐怖心が必	強い思いが必要になる。あんだ達の話から考	「ただそのためには雫がそうなった瞬間の	当に！？」と言いたげな表情をしていた。	将は笑う。目をあわせ合う五人は一樣に「本	緊張していたその場の空気を揺らすように女	か。」	「ひっひっひっ。随分と察しがいいじゃない	動しながら仏蘭が冗談めかしてそう言った。	番才から飛び降り、隣に座る紅蘭の太腿に移	ないですよ。」	「なによ。まさか、過去に戻るとか言い出さ	に、その瞬間へと行かねばならん。」	「雫が何を聞き、何を見たのかを知るため	向けられる。	一度仏蘭に集まった視線は、一斉に女将へと	にできることは何も無いわけ？」	「じゃっ、じゃあどうするのよ。わたしたち
------------------	------	----------------------	----------------------	---------------------	---------------------	----------------------	----------------------	-----	----------------------	----------------------	----------------------	---------	----------------------	-------------------	---------------------	--------	----------------------	-----------------	----------------------

な の ？ 」	「 ぼ く ら が 雫 姉 ち ゃ ん に お 願 い し て も だ め	し か で き な い 。	事 か を 思 案 し 、 五 人 は そ れ を た だ 見 守 る こ と	い う の も 、 で き る か ど う か 怪 し い ね え 。」 と 何	か い 。 今 直 接 雫 に 恐 怖 を 吐 き 出 し て も ら う と	い る 。 し か し 女 将 は 構 わ ず 話 を 続 け 、 「 そ う	「 づ え っ ！ 」 と 言 い な が ら 横 で 二 人 が 驚 い て	索 は ほ ぼ 不 可 能 か と 。」	風 は う ね り 、 屋 外 に 出 て い る と し た な ら ば 探	す が に 効 率 が 悪 い や も し れ ま せ ん ぞ 。 す で に	の 空 気 を 探 し 当 て る の は 、 可 能 で し よ う か 。 あ の 時	「 や や っ 。 八 雲 様 。 ど う で し よ う か 。 あ の 時	い ？ 」	ど う だ い 奥 占 や 。 雫 の 恐 怖 を 回 収 で き そ う か	「 あ あ も ち ろ ん さ 。 い く つ か 方 法 は あ る が	き て い な い 。	が ら 、 そ の 顔 に 薄 く 笑 み を 湛 え る こ と し か で	に 追 い つ い て い る 。 番 才 は 小 さ く 首 を 振 り な	漠 空 や 奥 占 を 除 け ば 、 仏 蘭 だ け が 女 将 の 発 言
------------------	---	---------------------------------	--	---	--	--	--	---	--	--	---	--	-------------	--	---	----------------------------	--	--	--

雷鼠が女将にそう提案する。
 「本当の恐怖というのは、人に話せるように
 なるまでに時間が掛かるものなんだよ。だか
 らそれはちよいと難しいだろうねえ。」
 「その、過去に戻るためになぜ恐怖心が必要
 なのでしょうか？」
 次に美禄が尋ねる。
 「時巡りの小瓶」というものを使う。その
 小瓶は、「侖（りん）」という穴掘りの一族
 が今はなき古の製造方法で作り出し、代々受
 け継いできたものだと言われている。その小
 瓶には時を巡る力が宿り、雫が恐怖を抱いた
 瞬間を目的地と為すためにだ。」
 そこまで話すと女将は話を切り、目を瞑って
 いた。漠空は目を開き、奥占も身体をその方向
 に向けた。
 「おや、もう準備はできているみたいだね。」
 女将の発言に反応して残りの五人も振り向く。
 「ええ。やはり小瓶を使われるんですね。す
 でに準備はできてます。」

